ゴリラくんと私とときどき苺

先日、ゴリラくんにお付き合いを申し込まれた。

ゴリラくんというのは、私と同じクラスで、私の隣の席に座っている男の子のことだ。ゴリラくん、という名前はもちろん本名じゃない。ゴリラくんは身体がとても大きかった。身長はもちろん、肩とか手とか足とか、毎日ボクシング部だったり相撲部に勧誘し続けられるほど、スポーツマンには魅力的でがっしりとした身体だった。なんでも家がトレーニングジムを経営しているらしくて、毎日鍛えられた結果こんな身体になったらしい。そんなゴリラくんは高校生にして百九十五センチの巨人で、女子高生二人を片腕でいとも簡単に持ち上げた。だからといってゴリラくんは筋肉マンみたいな全身ムキムキではなく、がっしりはしているけれど、しゅっとしているところもあって、おそらく細いマッチョさんに分類される。それでもゴリラくんは「女子高生を片腕で二人伝説」のことや、巨人で身体や肩幅が誰よりも大きかったことから、男の子たちを筆頭に、みんなは彼を「ゴリラくん」と呼ぶようになった。

「俺とお付き合いしてください」

そんなゴリラくんに、先日お付き合いを申し込まれた。私はびっくりした。ゴリラくんとは席が隣同士であれど、教科書を見せてもらったり見せてあげたり、わからない問題があったら教え合うときぐらいしか会話の機会がなかった。どうして、と聞いた私が間違えてしまったのかもしれない。ゴリラくんは先ほど以上に私をびっくりさせた。

「きみの血が食べたいから」

私はそのとき、学校の自販機で苺ミルクと選び間違えて買ったトマトジュースを飲んでいた。私はトマトジュースを盛大にむせた。

「きみの血は、とてもおいしそうだから」

めったに笑わないゴリラくんが笑った。とても優しい笑顔だった。私は鼻から出そうになったトマトジュースを、二度と買わないと心に誓った。

†

ゴリラくんは私と同じで、必要以上のことをあまり喋れない人だった。だから口数が少なく、私と話している内容も、ほとんどが授業のことか、宿題のこととか、今日は暑いねとか、あの雲大きいねとか、そんなことぐらいだった。でも、それでも交際を申し込まれてからは話す回数が増えた。ゴリラくんが私に話しかけてくれるのだ。クラスのみんなは、ゴリラくんが自分から何かを話そうとする子じゃないのを知っているから、一体どうたらし込んだの、と驚かれる。私の方が驚いているのに、そんなこと言われても困る。あのお

申し込み以降、私たちがした血以外の特別な会話なんて、
「ゴリラくんってニンニク食べる？」
「料理に入ってたら」
「教会とか怖くない？」
「仏教だから教会に行く機会がない」
「ゴリラくんって夜行生物？」
「今起きれてるから、昼行生物だと思われる」
「……バナナ好き？」
「苺のほうが好き」
ぐらいしか思い出せないというのに。
交際についてはひとまず保留にさせてもらった。申し訳ない気持ちもあるけれど、待ってる間がんばるから、というゴリラくんの言葉に甘えることにした。がんばるから、という意味がどういう意味か今ひとつわかってないけれど、ゴリラくんとの会話は楽しかった。やっぱり話題は授業のことかお天気のことや、町で見かけた野良猫さんの話ばかりだったけれど、そういうお話が私は楽しかった。二人ともあまりお話が得意じゃないから、ゆっくり、のんびり話が出来るのも嬉しかった。不意にゴリラくんが私の顔より大きい手で頭を撫でてきたり、重い荷物を持ってくれたり、一緒に教室を移動しているときに人とぶつかりそうになると、私のちゃっちい腕を引き寄せてくれたりすると、少しどきどきした。あと、ゴリラくんの爪は丸爪だということや、睫毛がすごく短いことを発見すると、なんだか嬉しかった。笑った顔はあの日以外見ていないけれど、今度はいつ見れるかな、と考えたりしたこともあった。ただひとつ、苦言を言うならば。
「だめ？」
毎日、いつもと同じ表情が小さい顔で首を傾げられて、私の生き血を催促されるのは、やっぱり、すこし困る。

†

そんなこんなでしばらく時間は経過したのに、ゴリラくんが私にお付き合いを申し込んだ理由がまだはっきりとわからなかった。血がおいしそう、というのは、まあ、置いておいて。百六十センチという平均のようなそうでもないような、平凡な私のどこをお気に召してもらえたのだろう。
その日も首を傾げられて曖昧に笑っていると、ぽつん、と教室の窓に雫がぶつかった。そのままたくさんの雫が降ってきて、ざあざあと雨の音が鳴り響く。
「ゴリラくん、傘持ってきた？」
「いや」
「そっか……」

そのときの私たちは下校を共にするようになっていた。クラスメイトの子たちは私たちが既にお付き合いしてると思い込んでいる。きちんと否定しない私たちもどうかと思う。

天気予報のお姉さんは雨なんて全然話していなかった所為で、放課後の教室はお姉さんへのブーイングでざわついた。私は鞄の中に眠らせていたブツを、ゴリラくんに見せようかどうか迷う。三秒迷って、見せることにした。

「あのですね、ゴリラくん」

「ん」

「ここに折りたたみ傘があるのですが、あの、よかったら、ですが」

ゴリラくんは頷いた。きっと意味も理解している。気恥ずかしくなって俯くと、いつものように大きな手で頭を撫でられた。

校門まで来て、いそいそ折りたたみ傘を開けようとしたらゴリラくんにやんわりと奪われる。ゴリラくんは片手で包み込めそうな傘を広げた。すると小さな傘は、全身全霊でゴリラくんの領域だけを雨から守った。

「……ごめん」

「こ、こちらこそ、ごめん」

ゴリラくんは半分の領域をくれた。どうしてもお互いの肩が半分濡れてしまうけれど、それでも出来る限り、濡れてしまわないようにくっつくべき状況になる。。

「あいあいがさだ」

まさかきちんと言葉にされるとは思わなくて、私は素直に赤面した。

ざあざあと音が響く中、ふたりきりで歩く。見上げると、ゴリラくんが持つ折りたたみ傘が身長差の関係で遠く見えてとても不思議な感覚があった。三十センチ強ある差はやっぱり大きい。背伸びしたって私の顔はゴリラくんの胸とお腹の真ん中ちょっと上の位置にある。

「大丈夫？　冷たくない？」

「う、うん、大丈夫」

不意にゴリラくんが少し屈んで私を見るから、妙にびっくりした私は歩みを止めて俯いてしまう。ただでさえ腕と腕が触れ合っているのに、これ以上近づかれると、心臓をその大きな手で鷲掴みにされそうになる。ゴリラくんは不思議そうに私をじっと見る。恥ずかして、雨なのに顔があつくて、でも、今なら言えそうな気がした。

「ゴ、リラくんは、どうして、私とお付き合いしたいの」

ゴリラくんは目をぱちぱちさせて、短い睫毛を揺らす。頑張って私はその目と対面する。真っ黒な目。何度も私を映した目。

「きみの血が」

「そ、そうじゃなくて、ええと、ゴリラくんには大切なことかもしれないけど、それじゃわかんなくて。なんでおいしそうなのかなとか、なんで私なのかなとか、そういう、こう」

せいいっぱい考えた。どう言えばいいのか自分でもさっぱりわからなかったけど、いっ

ぱい話そうとした。でもゴリラくんは私の全部を汲んでくれた。
「すきだから」
雨の音。人通りの少ない歩道。低い声。
「必死に何か考えてる顔とか、はにかんでる顔とか、すぐ赤くなる顔とか、やさしい声とか、言葉とか、かわいくて、好きになって、そんなきみの身体や血はどんなもので出来てるんだろうって考えて。もしきみの血を食べたらきっと、すごくおいしくて、すごくあまいんだろうなって」
淡々と流れる豪雨に顔のあつさを抑えられない。いつものゴリラくんの顔だから、さらにあつい。そういうことを先に言うべきだったんじゃないのとか、そこでどうして血を食べたいっていう発想になるのとか、言うべきことはたくさんある気がするのに、「た、たべ、るって」と、私は噛む回数を増やすことしかできない。
「ま、前から思ってたけど、そういうの、吸血鬼みたい」
「俺はゴリラだよ」
「苺で我慢しようよ」
「いやだ」
「私おいしくないよ……」
「うそだ」
「う、うそじゃな」
折りたたみ傘が下を向いた。冷たい雫がいっぱい頭に落ちる。ゴリラくんの短い睫毛が目の前にある。私の口唇にゴリラくんの歯があることに気づくのに一秒かかる。びっくりして、すぐ痛みがきた。
「い」
ぶち、と雨に紛れそうな音。首と背中に手が回って、ぎゅっと私の身体が大きい身体に収められる。生温かいものが口唇から少し溢れて、ゴリラくんが、ゆっくり、味わうように口に含む。何度もあまく噛まれる。びっくりしている間に全部が終わって、少し離れて、ゴリラくんは「ほら」と言った。
「やっぱり、おいしい」
笑う。やさしく、やわらかく、しあわせそうに笑う。私は一瞬ぽかんとして、五秒くらい経って、顔を破裂しそうなくらい赤くした。
「び、びっくりした！」
「ごちそうさまでした」
「そういうご丁寧なのはいらなくて……！」
「きみも食べていいよ」
え、と言う前に身体が浮く。気づいたときに私はゴリラくんの腕に座っていた。抱えられたんだ。女子二人をぶら下げた腕に。「え、え」としか言えない私にまたゴリラくんが笑う。今日はよく笑う日だ。その顔を見下げていることに、新鮮さと恥ずかしさと、嬉しさ

が混じる。
ゴリラくんは目を閉じた。
「これで、おあいこ」
そう笑う顔がすごく楽しそうで、私はまだ鉄の味がする自分の口唇を噛む。全然おいしくない。おいしくない、けど。迷って迷って、雨はざあざあ降りつづいて、私もゴリラくんもずぶ濡れて、いっぱい迷って、答えを出す。
「わたしも、すき」
え、とゴリラくんが目を開ける。そして私はゴリラくんの口唇にかぶりついた。